

米山敬子 (神奈川県・藤沢市) 2

井出京子 (山梨県・甲府市) 3

写真自分史づくり⑤ 4

「俳句と身体」⑥ 俳人 黒岩徳将 16

喜怒哀楽

詠み人応援マガジン・詩歌俳壇ニユース

にいがた 食の歳時記 ～ルレクチエ～



洋ナシ、といえば、皆さんは何を思い浮かべるだろうか。やはり、俳句で秋の季語になっている「ラ・フランス」だろうか。でもたぶん、新潟人は違う。生産量は洋ナシ全体の7-8%と少ないが、その中でも80%を新潟で生産している、幻の洋ナシ「ルレクチエ」を真っ先に思い出すだろう。生産が難しく、他の品種に比べて長い追熟期間が必要なことなどもあり、出回ることが少ないようだ。当初は、ご家庭で食すために生産されていたとか（新潟人はこのパターンが多いのか）。甘みも口当たりもとっても良い。いつか、俳句で詠まれる日が来るほどに有名になることをひそかに祈願している。

「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し(株)ミュージック・コーポレーション喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。

12-1
Vol.113

温古知新 ⑥

「菜根譚」37

季節はすっかり冬。寒くなり、外に出るのも億劫になってまいりましたが、お家のお供に「温古知新」をどうぞ！

父は慈、子は孝、兄は友し、弟は恭す。縦い極処に做し到るも、俱に是れ、合当に此の如くなるべく、一毫の感激の念頭も着け得ざれ。如し施す者は徳に任じ、受くる者は恩を懐わば、便ち是れ路人にして便ち市道と成らん。

(父は子を慈しみ、子は父に孝行し、兄は弟を友愛し、弟は兄を敬愛する。たとえ、それが理想的に出来たとしても、それは当り前で、少しの感激もされるものでもない。もし、それを行う者が満足感を得たり、受ける者がありがたみを感じたら、それは他人同士であり、利益の生じる付き合いになる。) 家族を大事にするのももちろんのことですが、そこが当たり前にできるよう、他の人にもそのように接していければ一番ですね。

妍有れば必ず醜有りありて之が対為す。我、妍に誇らずば、誰か能く我を醜とせん。潔有れば必ず汚有りて之が仇を為す。我、潔を好まずば、誰か能く我を汚とせん。(美しいものがあれば必ず醜いものもあり、対をなす。自分から美しさを誇らなければ、

誰が醜いと言おうか。清いものがあれば必ず汚いものもあり、対をなす。自分が清いものだけを好まなければ、誰が汚いとするだろうか。)

中庸の心が大事。丁度良くが一番難しいです。

炎涼の態は、富貴にありて貧賤よりも更に甚し。妬忌の心は、骨肉にありて外人よりも尤も狠し。此この処、若し当たるに冷腸を以てし、御するに平気を以てせざれば、日として煩惱障中に坐せざること鮮なからん。

(人に対する心が厚過ぎたり薄過ぎたりする態度は、高貴で豊かな者の方が貧しい者よりも一層激しい。妬んだり恨んだりする心は、身内の者に対しての方があって、他人に対するものより一層激しい。このようであるから、冷静な心でこの心をうまく制御しないと、一日として身心を苦しめ悩ます生活の中にいないことはない。)

今回までお付き合いいただき、ありがとうございました。メールマガジンにてひっそり続けていく予定です。またお会いできますよう。
(古川久美子)

米山敬子様

『句集 花篝』

(神奈川県・藤沢市)



▲「旅も俳句があればこそ楽しさも倍増」と話す米山さま

俳句を始めて三十年余、今年九月、自分史のつもりでまとめようと、自選した俳句三三〇句を収めた句集『花篝』を上梓された米山敬子様にお話を聞きました。

Q 『句集 花篝』を出版しようと思った経緯は？

俳句との出会いは、友人の父上で、俳人の橋本夢道氏の遺作展を俳句文学館で拝見したこと。以来全句集を拝読し、その奔放な自由律の俳句から受けた衝撃と感動は今も忘れません。その後、飯田蛇笏、龍太の伝統的な本格俳句に魅了され俳句を学ぶようになりました。

ある日、先輩の句友から句集上梓の手伝いを依頼され、その際すべてを任せましたので、約一年かけてようやく出版に漕ぎつきました。その時の経験から、いつか自分でも句集を出版で

きたらという希望がありました。

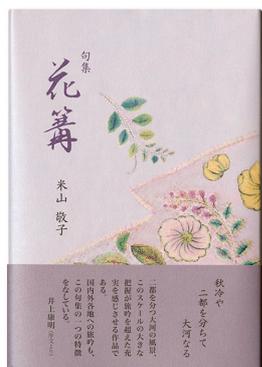
たまたま米寿を過ぎ自祝のつもりで今までの俳句をまとめてみようと思いい、コロナで自粛の日々だったこともプラスに考えて、「思い立ったが吉日」と句集を出すことにしました。出版に際しては、句友の句集を通して貴社を知り、何か魅かれるものを感じ資料を送っていただいたことが縁となりました。

Q 本を出すまでのご苦労は？

初心から三十年間の句はすべて記録してありましたので、その中から年別、季節別に分類し自選で三三〇句を目標にしました。どうしても好きな季節の句数が多く、バランスをとるのに手間取りました。

旅が好きなので旅吟が多く、ともすれば観光俳句になってしまうので、その点は留意しながら、数をしぼるのに苦心しました。また、折々の句の中には親族をはじめ、大勢の人との永別、また孫、曾孫の誕生など悲喜こもごもありますが、私情のからむ句はなるべく避けました。自粛のため、木戸さんとは一度しかお会い出来ませんでした。が、手紙や宅配便、電話のみの連絡でも特に不安はありませんでした。

句集名は一番好きな花、桜を追って沖繩から知床まで旅した思い出から、すぐに決まりましたが、表紙カバーが大変でした。私の希望で、自分で染めた「辻が花染め（絞り染め）」の模様を取り入れたため、着物を送ったり、思うような色が出るまで何度もやり直



▲句集『花篝』は各地の桜を追って旅をした思い出に依る

したりと、喜怒哀楽書房の方々にはご苦労をおかけしました。

Q 出版された本を手にした時は？

句集をはじめて手にした時、思っていた以上の美しい仕上がりに思わず涙がこぼれました。表紙カバーの色、装丁も素晴らしく、句の配列も見やすく、あたたかみのある本に仕上がったことを大変うれしく思いました。

また何より、主宰の井上康明先生の温情あふれる序文は、拙い句集に花を添えていただき、この上なく光栄なことでした。

Q これからの目標はおありですか？

以前から少々書き溜めてあるエッセイを清書したり、また紀行文等を書き足したりしながら、いつかまとめて小品にしたいと夢見ています。出来ることなら辻が花染めも続けたいし、今は時々青墨で草花などを描いたりしています。でも何よりも、やはり旅が好きなので、プランをたてて思い出の場所を再訪してみたいと思っています。ご苦労をおかけしたスタッフの皆さんにお会いするために、新潟にもぜひ!!

句集『花篝』より

白南風や真珠工房潮騒す
同じ窓同じ空見て夏果つる
月の夜の次の波待つ蟹の群れ
少年にふつと哀しき林檎の香
寄港して誰彼の訃や春の月

■ 帯文より

秋冷や二都を分ちて大河なる
二都を分つ大河の風景、このスケールの大きな把握が旅吟を超えた充実を感じさせる作品である。国内外各地への旅吟も、この句集の一つの特徴をなしている。」

一井上康明（「郭公」主宰）

★横浜の待ち合わせの場所、お会いしたことはなくお歳は八十八歳とお聞きしていたので、外見と身のこなしからこの方ではなからうと思っていた。がしかし、この方だった。とにかく旅が好きで、思い立ったら即予定を立てて一人でもいくのだとか。華やかで話題に事欠かず、手元のスマホの写真を練りながら、国内外への旅やご家族のことなどお話をくださる。独り居でも、俳句やエッセイ書きのほかに、散歩やご近所とのお付き合いや、得意の手芸でお友達のプレゼントを作ったりと、いつも何かをされている。本句集へのお返事も一六〇通程あったとのこと、お付き合いの広さがうかがえる。最後の船旅と思っていた今春の予定も、コロナで中止に。ぜひ早いうちに実現させたいですね。
(木戸敦子)

井出京子様 『歌集 銀の花芽』

(山梨県・甲府市)

短歌を始めて十二年、十月に歌誌『富士』に発表した作品から三五〇首を収めた歌集『銀の花芽』を上梓された井出京子様にお話をお聞きしました。

Q 出版の経緯からお聞きします

短歌の三十一文字にはその作り手の、その時々の特徴が描かれます。短歌を始めた頃から、いつかは歌集にまとめて家族に残したいと思っていました。とは言え、歌歴も短く歌に自信のない私は

この世にはまだ未練あり遂げられぬ夢の一つを夫にも告げず

と歌に詠んでいました。何かの折、それを知った夫が「素直に主宰の先生にうかがってみるのが一番だよ」と背中を押してくれました。師である川崎先生は、『富士』に載っている歌の中から私が選歌します、十分な歌数はありますから歌集は出せますよ」と喜ん



▲歌以外にも日舞に蘭の栽培にと充実の毎日

てくださいました。先生にお聞きした翌年の令和二年は、ちょうど七十七歳でもあり、そうだ喜寿の記念に出版しようと思いましたが、

Q 本を出すまでのご苦労は?

先生に選歌をお願いするためには、今までの十年超の歌をパソコンに入力し、そのデータをお渡ししなければなりません。不得手ながら昼夜パソコンに向かいましたが、出版の夢に向けた作業だったので、むしろ楽しみに変わっていききました。出版のことなど全くの未経験ながら、その後のことはすべて川崎先生と喜怒哀楽書房様のご指導により、難なく進めることができました。コロナ禍で自粛や家に籠っている期間が、私には追い風となりラッキーな時間となりました。

Q 出版された本を手にした時は?

歌集が届けられる日は、まるで子や孫を待つ気分で受け取りました。私の歌は家の周りの自然や生活詠が多く、自身の生きた証、自分史と想っておりますので、家族に歌集を残せたことに満足しています。沢山の山の山を見た時、さてこの発送・配付をどうしたものかと考えました。幸いにも、ネットを利用する「クリックポスト」はどう? という息子の協力があって、宛名貼り・封筒詰めは夫が手伝ってくれました。知人や友人に進呈した後の反響は想像をはるかに越え、本人である私以上と思えるほど、とても喜んでくれ感激しました。従姉妹(詩人の星乃真



▲明るい表紙は作者を彷彿とさせる

呂夢)も、適切な評と今後のエールをくれました。今は人生の一区切りになったと安堵し、次への希望に向えると思っています。

Q これから先は?

わが家には農地があり、野菜や果実を栽培しています。家籠りの間もストレスを溜めることなく青空の下で働き、秋冬の野菜も例年以上に青々と茂っています。歌集名も「飛び来たる棕よ辛夷に啄むな空に光れる銀の花芽を」の歌からとりました。庭の真ん中の家を新築する際に夫と探して来た辛夷の木は、木陰でコーヒータ임을楽しんで、小鳥を眺めたりと、一年を通して生活とともにある木です。

また、以前から趣味で育てている蘭は、寒さにも暑さにも弱く、最近の地球温暖化による猛暑は蘭に大変な打撃を与えています。それでも、今年もすでに花芽が出始めた鉢があります。新しい蘭の苗を東京ドームで開かれる「世界ラン展」で買い足したいと思っています。でしたが、コロナ禍でその願いは叶いませんでした。ワクチンや治療薬が早く出回ることを切に願っています。短歌については今回の出版を機

に、これからの老いの人生を大切に見つめ、その一つ一つの思いを歌に残していきたいと思っています。

『歌集 銀の花芽』より

入りつ日の光反して田植待つ水田さざ波大なる湖

ずんずんと積もる大雪夕闇に老いの二人を家ごと包む

明け暮れに明かり振りつつ野の道に誰ぞ大きく空を仰ぐは

★お会いした第一印象は、ぱっとその場が明るくなる向日葵のような方。聞けば夫と同じ職場で働いていたが、夫の管理職昇進により退職勧奨、翌年は新しい職場にうつり定年まで勤めあげたとか。そこでは定年後の趣味・生きがいづくりを提唱する仕事に就き、まずは「隗より始めよ」と自らが蘭の栽培を始め、六十三歳からは日舞を習い、短歌を始めたのは六十五歳だったという。一線で働き続けたあとは、趣味と日常を充実させ、色とりどりの花を咲かせ、名取となり、歌集に結実させるという人生。今、コロナ禍でも人生の祝福にあふれている。(木戸敦子)



▲シンビジウム、デンドロビウムなど自宅は蘭でいっぱい

写真自分史づくり

～スタッフ松野が祖父の写真自分史の手伝いをします～

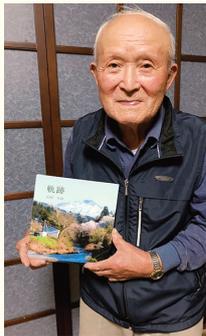
祖父の人生を一冊の本にまとめるだけでなく、家族との絆をより深めることができた写真自分史作りでした。



4 本文と表紙を貼り付ける
溝に両面テープをつけて本文の位置を決めます。くろみ機に通して溝と本文を接着します。本文にハケで糊を塗り、表紙と接着させます。簡単そうに見えますが、糊を適量にまんべんなく塗るのは難しい作業。職人のなせる技です。



5 機械に通し、より強固に接着させる
専用の機械にアルバムをセットし、両サイドから圧をかけ、糊をより強固に接着させます。2種類の機械を使用し、より丁寧仕上げます。



6 完成。検品後、お客様の元へ
完成したアルバムを送ります。お客様が検品し、お客様の元へ発送します。アルバムを手にした祖父は、涙を浮かべながら、大切に1枚1枚ページをめくっていました。また、家族全員でアルバムを開き、この時はああだった、こうだった、とワイワイ談笑しながら、祖父と家族の軌跡を辿りました。

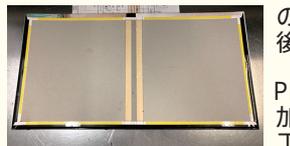
前回は、祖父本人による校正の様子をご紹介しました。今回は、製本の様子をお伝えします。



1 表紙・本文印刷
校正で訂正箇所を修正したら、ついに印刷に入ります。写真自分史は、当社の母体会社・木戸製本所が所有する印刷機で刷ります。



2 印刷した本文を糊で貼り合わせ、断裁する
本文用紙は、普通の紙より厚みがあります。これは、2枚の紙の裏面に糊をつけ、裏面同士を貼り合わせて1ページにしているためです。こうすることにより、1ページ1ページが丈夫になり、180度見開けるアルバムが出来あがります。本文を貼り合わせたら、断裁機で上下(天地)を切り落として見栄え良くします。



3 表紙を作る
印刷機で刷った表紙の表面を、PP(ポリプロピレン)と呼ばれる透明のフィルムで圧着コーティングします。PP加工することにより、耐久性に優れ、美しく本格的な本に仕上がります。その後、PP加工された表紙をポール紙に包み込むように糊で貼り付けます。これを、表紙貼りといっています。

句集への道

(第五回)

一木戸敦子が自分の句集づくりにチャレンジ!



▲表紙や見返しの紙をデザイン担当の上村(左)と選ぶ

◆あとは野となれ山となれ
がしかし、その一方で、当の本人は駄句をさらし、読んでもらってどうするの、こっぴどく引返し返さない...そんな思いが渦巻いてくる。あー、煮え切らない往生際の悪さ、いやだねえ。お客様もこんな思いを抱いていたのだろうか。あとは野となれ山となれ。アブラカタブラ、チチンブイ。恥の文化、恥の私だ。今までお付き合いくださりありがとうございました。

◆タイトルとデザイン決定!
収録した俳句は120句。その後も俳句は細々と作っているわけで、もう少しまともな句と入れ替える?とは思うもの、それを言ったらキリはなし。えー、仕方なしと諦める。デザイン?書名と氏名だけでいいから誰か考えて!とは思いますが、書名を決めないことには...と思に至る。前回の段階では「一念発句」としたもの、単なる思い付きで実はしつくりとはきていなかった。
人は自分がないものに憧れる。背が高いということもあり、本のサイズは縦148mm×横118mm。手のひらサイズの小冊子。「小さい」という言葉から、ドイツ語の「アイネ・クライネ」と思ったが、調べると某ミュージシャンの曲にあり。それでは、ひらがなの「あいね・くらいね」に。ここからは一気にイメージが膨らんだ。文字の配置や書体、紙の選別、スタッフの協力を得る。何とか本になりそうな予感が。そしてデザインナーの渡辺リリコさんの本を当社



◆あとは野となれ山となれ
がしかし、その一方で、当の本人は駄句をさらし、読んでもらってどうするの、こっぴどく引返し返さない...そんな思いが渦巻いてくる。あー、煮え切らない往生際の悪さ、いやだねえ。お客様もこんな思いを抱いていたのだろうか。あとは野となれ山となれ。アブラカタブラ、チチンブイ。恥の文化、恥の私だ。今までお付き合いくださりありがとうございました。

◆あとは野となれ山となれ
がしかし、その一方で、当の本人は駄句をさらし、読んでもらってどうするの、こっぴどく引返し返さない...そんな思いが渦巻いてくる。あー、煮え切らない往生際の悪さ、いやだねえ。お客様もこんな思いを抱いていたのだろうか。あとは野となれ山となれ。アブラカタブラ、チチンブイ。恥の文化、恥の私だ。今までお付き合いくださりありがとうございました。

◆あとは野となれ山となれ
がしかし、その一方で、当の本人は駄句をさらし、読んでもらってどうするの、こっぴどく引返し返さない...そんな思いが渦巻いてくる。あー、煮え切らない往生際の悪さ、いやだねえ。お客様もこんな思いを抱いていたのだろうか。あとは野となれ山となれ。アブラカタブラ、チチンブイ。恥の文化、恥の私だ。今までお付き合いくださりありがとうございました。

※誌面の都合上、掲載は原則お一人さま1作品とさせていただきます。
今回の投稿作品数は、249でした。



投稿作品

川柳

- 1 平和惚けしなさいさせない御代であれ
細川光子(栃木県)
- 2 B面の居心地良さよ縄のれん
木村洋一(新潟県)
- 3 老人人間失格再読す
原 崇雄(埼玉県)
- 4 諭吉さんとお出かけをする嬉しい日
目黒豊光(福島県)
- 5 巣ごもりでバスは空気を運んでる
守屋高雄(岩手県)
- 6 子供らのマスク元気な募金箱
鈴木義雄(福島県)
- 7 カレンダーも我も溜息十二月
小山恵美子(大阪府)
- 8 大切な話がちよつとあると言う
丸山芳夫(東京都)
- 9 コロナに明けコロナに暮れてまだコ
ロナ
橋本世紀男(東京都)
- 10 人の性喜怒哀楽に終りなく
近藤富夫(東京都)
- 11 雲ながれ父を知らない子も喜寿に
奥那於子(大阪府)
- 12 ドラマ「エール」戦禍・絆に感涙す
久保壽雄(北海道)
- 13 世事喰つて世智に食べられ喰えぬ世
辞 関本 守(新潟県)

- 14 コロナ余波夕張メロン大安売り
花貫 寥(東京都)
- 15 級会孫あずけて午前さま
原田治男(東京都)
- 16 迷い箸きようは大目にお節膳
中村康浩(福岡県)
- 17 稲背負い歩いた道を懐かしむ
金子ゆり子(新潟県)
- 18 我が夫後悔も反省もなし楽天家
田村よし(茨城県)
- 19 冬晴れやカランカランの空頭
置鮎勝美(千葉県)
- 20 化粧直し喜怒哀楽の喜楽呼び
長谷川庄二郎(千葉県)
- 21 孫に聞く鬼滅の刃何の事
小山泰正(新潟県)
- 22 コロナ禍と天変地異は人由来
伏見の馬酒(京都府)
- 23 夢を持ち明日も頑ばる心意気
松田義登(福岡県)
- 24 子規の墓柿を供へて地べた句座
井原毬子(東京都)
- 25 名月やビルの狭間に修まりて
高崎登喜子(東京都)
- 26 外つ国に生きて来れり大白鳥
有坂馨園(福島県)
- 27 十六夜や八十路が握る車椅子
小島岳青(新潟県)
- 28 故郷は終点の駅星月夜
檜山柚子香(東京都)
- 29 コスモスの濃淡そつと塗り分けり
若月理依子(新潟県)
- 30 貼紙の閉店の文字秋湿
多田文代(東京都)

俳句

- 31 バイトする孫を陰から秋の街
松尾らん(東京都)
- 32 ふる里は浅間高原キャベツ畑
山崎吉晴(群馬県)
- 33 義理不義理はかりにかけて賀状書く
長峰正晴(千葉県)
- 34 金木犀散り満天の星となり
古閑智子(神奈川県)
- 35 ペーパーの裏側さぐる狸かな
福岡 悟(東京都)
- 36 コロコロと落葉を友に朝散歩
白松いちろう(千葉県)
- 37 秋涼し復興の地の泥靴
溝畑万年青(埼玉県)
- 38 枯蓮の根元に育つ力かな
堅田秀子(東京都)
- 39 爽やかや子規の句碑あり法隆寺
天野輝子(東京都)
- 40 桜紅葉落ちて転げて裏おもて
三津木俊幸(千葉県)
- 41 森の道何か落ちたる小春風
小澤円梨(静岡県)
- 42 遠近の吾亦紅みな独りぼち
古谷 力(東京都)
- 43 感謝して最後の投稿秋の暮
塩崎須美子(神奈川県)
- 44 何処からも富士は正面初御空
鶴房万葉(兵庫県)
- 45 長椅子かベンチなのかな寒の月
白戸麻奈(東京都)
- 46 七宝の壺の曲線初しぐれ
環 順子(東京都)
- 47 米寿越へ卒寿の道へ去年今年
内河邦久(東京都)
- 48 まだ健と大正生まれ賀状書き
磯部 力(新潟県)
- 49 おだやかに卒寿の日々や秋彼岸
齋藤光雄(新潟県)
- 50 人にある喜怒哀楽や去年今年
小林七重(新潟県)
- 51 秋の蚊や音もなく来し去る速さ
西條公雄(埼玉県)
- 52 育ちたる屋敷の跡や小粒柿
杉原明子(静岡県)
- 53 液体で動いていますと賀状書く
湯浅芳郎(岡山県)
- 54 名月や熊笹肝胆相照らす
津田卿雲(岡山県)
- 55 さまざまのこと思ひだす月夜かな
小田ゆかり(新潟県)
- 56 電線にみな燕尾服燕去る
居原田暹(大阪府)
- 57 鳩の群はばたき落葉おどろかす
清まさじ(静岡県)
- 58 ありがたや「喜怒哀楽」に生かされ
阿部徳夫(宮城県)
- 59 神域で拾いし木の実は母へ
望月哲土(東京都)
- 60 雲海を抜けて照り葉の湯小屋かな
上村元義(神奈川県)
- 61 一茶忌や兜太の生の声響く
岩村 昇(神奈川県)
- 62 人情に触るる幸せ小鳥来る
鈴木清子(埼玉県)
- 63 一灯を猫と頷てる夜長かな
高松玲子(埼玉県)
- 64 吹かれては熟柿あらはになりゆけり
大阿久雅子(埼玉県)
- 65 葉櫻や心はずみし散歩道
河野静子(埼玉県)
- 66 新潟の西区の路地に小鳥来る
竹本美美子(新潟県)

投稿作品



- 67 諸掘るや三本鉞へ力込め
関 誠(新潟県)
- 68 てつぺんは一坪の田や豊の秋
佐藤 信(神奈川県)
- 69 揺れにゆれ命の舟は枯野まで
早乙女文子(埼玉県)
- 70 亡き父は磊々落々朴の花
向井加代子(愛媛県)
- 71 秋草を挿して贖物活かしけり
今井勝子(新潟県)
- 72 用足して猫走り去る秋夕焼
坪田勝秀(鹿児島県)
- 73 災害が予測できても被害でる
和崎治人(山口県)
- 74 坐禅組む寺の色なき風の音
羽深そら(埼玉県)
- 75 焼きつくす酷暑にコロナ地獄とは
大塚徳子(埼玉県)
- 76 秋明菊たつぶり供へ朝の径
道給一恵(埼玉県)
- 77 ラジオ派の世界広がる夜長かな
青木凉子(埼玉県)
- 78 卒寿とふ齡の関や秋ざくら
佐野和彦(静岡県)
- 79 金木犀こぼれ羅漢の深き黙
中嶋清子(佐賀県)
- 80 家々に実る渋柿村豊か
平林温州(兵庫県)
- 81 端居して友と語れる昭和かな
堀木和子(大阪府)
- 82 耶蘇聖鐘鳴り継ぐ島や雁渡し
坪井研治(東京都)
- 83 新酒くむ月を窓辺に旅の宿
津布久信雄(東京都)
- 84 花水木バスの乗り場を囲ひけり
間森 坦(兵庫県)
- 85 竜胆の青の深さやちぎれ雲
木田亜津子(兵庫県)
- 86 我独り木々は語らず秋の山
杉本敬治(愛知県)
- 87 泡立草色づく頃となりけり
星 一子(神奈川県)
- 88 夕やけの空に一つの雲浮かぶ
湯浅暉子(石川県)
- 89 虫の音のいよいよ闇を深くせり
吉村充治(埼玉県)
- 90 蟻螂に雨戸一枚預け置く
橋本 絢(東京都)
- 91 コロナ禍の自粛子年の年忘れ
小泉芝雲(千葉県)
- 92 枯山水へ開け放されし夏座敷
平山千江(岩手県)
- 93 初写真笑顔の一つ加はりぬ
高野ほづ子(千葉県)
- 94 おみやげと新米いただきうれし顔
杉村美保子(岩手県)
- 95 川岸のこの世華やぐ曼珠沙華
片山茂子(埼玉県)
- 96 夕の膳彩どりそえる柿贈
中田文子(大阪府)
- 97 園児掘る新じゃが丸き一口ぶん
井上氣海(広島県)
- 98 酔芙蓉黄泉へ旅立つ師の笑顔
関山恵一(神奈川県)
- 99 娘との夜のデザート梨をむく
松坂雪雄(埼玉県)
- 100 爽やかや終活の過去みな時効
日名子春実(群馬県)
- 101 深窓の乙女のやうに毛糸編む
すずき笑子(東京都)
- 102 密になり弾むおしゃべり秋海棠
井田由利子(宮城県)
- 103 彼岸花庭に咲きたる赤と白
松島章子(兵庫県)
- 104 粉末の乾燥機音夜もすがら
高野春枝(埼玉県)
- 105 草花を愛する黒衣山頭火忌
島村幸重(兵庫県)
- 106 大の字に秋湯を浴びる特殊浴
浦橋渴雪(兵庫県)
- 107 天高しまた根掛りの笠子釣り
中野勝子(鹿児島県)
- 108 万歩計つけてひたすら秋日暮る
川嶋法子(東京都)
- 109 寂れたる狭庭に床し返り花
鏡たか子(山形県)
- 110 一年生家に着くまで運動会
鈴木米征(茨城県)
- 111 白壁に草の影あり秋深む
松嶋光秋(東京都)
- 112 西富士牧場牛追ふ鱒雲
神 一男(静岡県)
- 113 雁渡し心引き締め朝を行く
岩田 信(神奈川県)
- 114 家持の歌碑立つ大地草紅葉
田中 昶(鳥取県)
- 115 欄干の下をうつつにもみぢ山
近澤有孝(広島県)
- 116 吾亦紅一本に咲き密ならず
井上静夫(栃木県)
- 117 「GoTo」に大口開けて秋を食ふ
中川義彦(新潟県)
- 118 野仏を荘厳するごと曼殊沙華
渥美 保(滋賀県)
- 119 天恵のあふれてをりぬ虫の声
門田善二(兵庫県)
- 120 木犀の香りと共に俳句終え
長谷部喜代子(大阪府)
- 121 函嶺の青き稜線鳥渡る
米山敬子(神奈川県)
- 122 あかあかと湯ノ湖を染むる秋燕忌
山田富朗(埼玉県)
- 123 体温も測る受付秋講座
金子範子(高知県)
- 124 口ずさむ白秋の唄秋時雨
九法活恵(埼玉県)
- 125 秋灯のはやつきゐたる隣家かな
中澤寿美(神奈川県)
- 126 ミトン編む自粛の中の若き母
寺内 侖(埼玉県)
- 127 淡く色染めはじめての紅葉かな
宇都木安子(東京都)
- 128 休刊は新たな希望冬の虹
伊東ハル子(神奈川県)
- 129 街角にギター奏でる秋の夕
齊藤安弘(神奈川県)
- 130 秋風や書かねば言葉消えやすし
江口あや子(兵庫県)
- 131 能舞台ひだりにみたりこぼれ萩
木村徳夫(東京都)
- 132 令和二年涙なみだの年の暮
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 133 笠智衆の脇役渋しいわし雲
伊藤 修(埼玉県)
- 134 本借りて脳の目覚めし風邪心地
桜井葉子(千葉県)
- 135 小糠雨葉鶏頭より赤垂る
富高くにひろ(埼玉県)
- 136 牛若の袖に水注す老菊師
本庄準也(埼玉県)
- 137 支へ合い許しあう日々柿熟るる
倉沢ひとみ(静岡県)



- 138 煩惱の酒捨てきれず除夜の鐘
浅田季祐(埼玉県)
- 139 応援歌唄ひ終へたり小夜時雨
高井瑞江(広島県)
- 140 風花を見遣る童衆の頬紅し
貝瀬光洋(神奈川県)
- 141 ワクチンも不安拭えず凌霄花
中山日出子(大阪府)
- 142 新政権馬脚を露わし未枯るる
山里倫子(静岡県)
- 143 牧柵の先は見えずや草の絮
松下朱美(静岡県)
- 144 極楽じゃ二十才の孫と酌む新酒
清水君江(埼玉県)
- 145 さざんかの一氣に咲きし祝酒
鶴田静枝(神奈川県)
- 146 蜻蛉の空に故郷偲びけり
柴田恵美子(北海道)
- 147 誰彼に猷盃重ね月見酒
安田芳江(茨城県)
- 148 寒禽の脳天を刺す杜を出づ
高垣勝代(大阪府)
- 149 名月や東に向うジェット機
中岡宗治(三重県)
- 150 どの子にも大青空や七五三
椋本望生(大阪府)
- 151 穠穂を神に供へし田人かな
渡辺邦彦(新潟県)
- 152 月光や楽と聞こゆる波の音
内藤紀子(埼玉県)
- 153 我が影を見つめどこまで月の道
増田公代(東京都)
- 154 朝刊も堅く冷たく届きけり
若井令子(兵庫県)
- 155 磯伝いつわぶきの花泉境
北野耕兵(千葉県)
- 156 窓の闇混声合唱虫時雨
沖 惇子(大阪府)
- 157 小さき種大根となり食卓に
重原爽美(新潟県)
- 158 存へて大戦に地震新コロナ人は一生
に幾度出会ふ
黒澤正行(福島県)
- 159 金木犀オレンジの花散りしきて秋
の終りや伝えて行きぬ
本田智恵子(東京都)
- 160 句集出し数多の感想もらひをり幸
せ者よ趣味ある夫は
小島澄子(神奈川県)
- 161 家族皆無事元気で年迎えコロナなき
年健やかな年
大橋絵代(千葉県)
- 162 二十年「喜怒哀楽」に感謝のみ新し
き船出「ボンボヤージュ」
阿部澄江(宮城県)
- 163 窓越しのおぼる月などさかなにして
独り飲む酒五臓六腑に
岩崎弘舟(岡山県)
- 164 見上げれば大根スタレ開聞岳揃った
パッチワークの主人公たち
濱崎祥子(鹿児島県)
- 165 おのづから時雨にぬれて散る紅葉迷
ふことなく地にかえりゆく
野木宗信(奈良県)
- 166 被爆者の語り部を継ぐ若者の健気な
姿にエールを送る
関原幸子(東京都)
- 167 稲かりもみんな終っている広野一軒
だけが黄金色なり
高橋登志子(新潟県)
- 168 核の傘どの傘立てに返すのか日和山
小学校の傘立てでいいさ
安部 哲(新潟県)
- 169 紹介の小沼師想うオロロンの人生旅
よ今は哀しく
早坂絃司(北海道)
- 170 石灰の埃となりて雲の下明日は晴れ
るや茜のひかり
土屋喜雄(山梨県)
- 171 休刊になるとの知らせ寂しかりコロ
ナ禍の中想いは廻る
桑原謙一(群馬県)
- 172 歌一首まとめる事の難かしさ思いこ
みあげペンを置きたり
中沢敬子(千葉県)
- 173 こんなにも楽しみ多くふくれたる自
由の暮し傘寿なり
峯岸信子(東京都)
- 174 すぎにしは六十二年も前のこと独り
身となり夢よもう一度
佐伯セツ子(香川県)
- 175 自死の兄手帖に遺しし予科練の歌詞
のインクはわずかににじむ
寒川靖子(香川県)
- 176 コロナ禍の犠牲者多し非常時に武器
の爆買悲しかりけり
坂元正憲(東京都)
- 177 今日の日をしっかりと生きて深呼吸満
天の星私はこゝに
合田浩子(茨城県)
- 178 早苗かと思紛ふほどの糶田に早白鳥
の飛来あり
田中豊恵(新潟県)
- 179 母子して植えた稲田も予想外八俵と
れたと農協車来る
青木日出男(群馬県)
- 180 中天を雲の白波分け渡る鋭き鎌なむ
細き月なり
石尾曠師朗(東京都)
- 181 八百年楠の大樹でこぼこ根本陰に
涼をもらいてしむ
大鳥居牧子(東京都)
- 182 六人の任命拒否の理由言はぬ総理
の恣意に心冷えたり
久本にい地(岡山県)
- 183 精込めて手書きの賀状二百枚思い出
の旅弘前の城
守安幹男(岡山県)
- 184 夕日光うするう園を訪へばそそとゆ
れ合ふ十月桜は
内藤明子(東京都)
- 185 慕いたる父の命日人住まぬ生家に立
ち入り座布団に座る
森 由恵(奈良県)
- 186 朝いちに赤々輝く太陽に命火燃えて
身にほとばしる
津山和照(広島県)
- 187 毎日に感謝の心で時すぐる心丸くし
歳重ね行きたし
冨樫佐與子(新潟県)
- 188 待つことはやめんと心決めたれど耳
すましおり子からの電話
岩崎令子(大阪府)
- 189 幼子は銀杏の葉っぱ手でつまみあお
いでみたりまわしてみたり
早坂保文(宮城県)
- 190 おくい初め明日に向かい歩む足ひ孫
の人生健やかであれと
相馬 純(新潟県)

短歌





フォトイック

こちらの写真を見て詠んでいただきました。



(写真提供：浅田季祐さん)

- 201 おひげでねお顔が見えないサンタサン
飾り見てひげのサンタのごまんえつ
齋藤光雄(新潟県)
- 200 一時の安らふサンタクリスマス
小澤円梨(静岡県)
- 199 サンタさんコロナ対策忘れずに
橋本世紀男(東京都)
- 198 コロナ禍でプレゼントなしクリスマス
天野輝子(東京都)
- 197 サンタさん信じて待った息子は四十路
堅田秀子(東京都)
- 196 おひとりさまチキンレッグを買ってイブ
小山恵美子(大阪府)
- 195 今生きてクリスマス今さながらに
長峰正晴(千葉県)
- 194 サンタさん油売っていいのかな
山崎吉晴(群馬県)
- 193 早やばやとサンタクロス客迎へ
榎山柚子香(東京都)
- 192 早々とお出ましになるサンタさん
井原穂子(東京都)
- 191 例年のサンタ役なり待ち合い所
星 一子(神奈川県)
- 202 おいだれかサンタにくれよ何でもい
いよ
阿部澄江(宮城県)
- 203 コロナ禍がクリスマスまで終息を
岩崎弘舟(岡山県)
- 204 異人館屋根にサンタが夢遙か
居原田暹(大阪府)
- 205 コロナ禍も世界に届けるプレゼント
阿部徳夫(宮城県)
- 206 早いですね山下達郎が流れてる
濱崎祥子(鹿児島県)
- 207 クリスマスの次は正月楽しいな
岩村 昇(神奈川県)
- 208 人形のサンタながむる聖樹かな
鈴木清子(埼玉県)
- 209 ウイズコロナサンタクロスも所在
なげ
大阿久雅子(埼玉県)
- 210 コロナ禍や出番迷えるサンタさん
関原幸子(東京都)
- 211 口髭がじゃまをするからノーマスク
奥那於子(大阪府)
- 212 現し世か夢の中ともクリスマス
早乙女文子(埼玉県)
- 213 出来立ての一句を吊るす聖夜かな
今井勝子(新潟県)
- 214 クリスマス今年はコロナでクルシミ
ました
和崎治人(山口県)
- 215 私どう晴れ姿なり撮影会
大木和男(埼玉県)
- 216 幸福な中を元気に育つこと
高橋登志子(新潟県)
- 217 サンタクロス喜怒哀楽とつばやけ
り
安部 哲(新潟県)
- 218 普通顔してサンタわが家にやっつき
た
有田裕子(北海道)
- 219 髭もじゃのサンタの出番クリスマス
佐野和彦(静岡県)
- 220 星 一子(神奈川県)
- 221 サンタ様帰りはコロナ袋詰め
佐伯セツ子(香川県)
- 222 煙突の煤かサンタの髭の色
平山千江(岩手県)
- 223 満足に飾りつけたるクリスマス
片山茂子(埼玉県)
- 224 サンタさんは園長先生と見破られ
井上氣海(広島県)
- 225 クリスマスなんてなかった幼少期
金子ゆり子(新潟県)
- 226 サンタさん世界のコロナやつつけて！
合田浩子(茨城県)
- 227 吊し物何を誰れにとサンタさん
田中豊恵(新潟県)
- 228 クリスマス紅白マスク忘れずに
青木日出男(群馬県)
- 229 ウイルスの終息祈る聖夜かな
井田由利子(宮城県)
- 230 歌舞伎座をいば世界クリスマス
堀口 伸(埼玉県)
- 231 聖夜はやフィンランドの初手紙
中野勝子(鹿児島県)
- 232 出番近し自粛の日々やサンタさん
川嶋法子(東京都)
- 233 デカイツリーサンタが迷うプレゼ
ント
鏡たか子(山形県)
- 234 「おおー」きれいだなーそろそろ僕
の出番かな
大鳥居牧子(東京都)
- 235 見る人のうつとり眼吊し難
神 一男(静岡県)
- 236 商魂に煽られているクリスマス
久本にい地(岡山県)
- 237 ツリーにも飾るのCO2予約券
長谷川庄二郎(千葉県)
- 238 年金でサンタ工面のプレゼント
守安幹男(岡山県)
- 239 サンタさんコロナで今年ユーチー
ブ
金子範子(高知県)
- 240 聖夜来る髭の手入れもしなければ
九法活恵(埼玉県)
- 241 うむうむとサンタ見惚れるツリーか
な
寺内 侖(埼玉県)
- 242 ひげ自慢動かぬサンタ日は語る
宇都木安子(東京都)
- 243 サンタさま峠の茶屋でひと休み
齊藤安弘(神奈川県)
- 244 各階へ配る聖菓や一休み
本庄準也(埼玉県)
- 245 コロナ禍で今年サンタもクリぼっち
岩崎令子(大阪府)
- 246 ひとり身を包む聖樹の灯の数多
松下朱美(静岡県)
- 247 幻のサンタ見し子やもう五十路
清水君江(埼玉県)
- 248 サンタクロスマスク要らずの白い
髭
安田芳江(茨城県)
- 249 待ちわぶるサンタクロス星ふる夜
内藤紀子(埼玉県)

皆さま、長きにわたりご投稿をくださ
いまして、ありがとうございます！
一緒に楽しい広場をつくってください
こと、心よりお礼申し上げます。同じよ
うな体験に涙したり、笑ったり、同じも
のをみてこう感じるんだ、とか、こう表
現するんだ、とか：本当に素敵な時間を
すごさせていただきました。

*これからは、弊社ホームページにご投
稿ページをつくらうかと考え中です。開
設時期は来年を予定しております。メー
ルマガジンご登録の方には、メールにて
お知らせをさせていただきます。ぜひ、
ご登録ください。



「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんの回答をお寄せ頂きありがとうございました！その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。
※大賞と自句自解コーナーは年1回です。

◎短歌部門

5 征きしま、別れし父との畑道リニ

ア通過の赤き杭立つ

土屋喜雄(山梨県)

・ 思いの深さが歌に詠まれています

関原幸子(東京都)・「征きしま、」よ

き言葉の選択に共感 早坂絃司(北海

道)・畑道を舞台に過去たる父の回想

とリニアという近代化が対比され地元

の姿が眼に浮かぶ 田中昶(鳥取県)・

時代の移り変りを伝え幼少時に別れた

父を忍び、しかし現代の文明の中に生

きる切なさ父を思う日々。赤き杭が

印象的 米山敬子(神奈川県)・征く

という文字の重さを知る人が少なく

り不安 岩崎令子(大阪府)・戦後七

十五年の歳月がリニアの開設で時代の

変化を感じる。何もかも急ぎ過ぎで

は？ 伏見の馬酒(京都府)

29 震災後九年半を過ぎた今知人は未

だ不明のまま 早坂保文(宮城県)

・ 岩手、宮城、福島三県の行方不明者

が25000人余、心がいたむ 黒澤正

行(福島県)・忘れられないあの悲劇。

未だ不明の方の親族がいる事も 坂元

正憲(東京都)・もう帰ってこれない

所についてしまわれた知人を待つや

せなさですね 田中豊恵(新潟県)

◎川柳部門

50 当り外れ今頃やっと解る妻

長谷川庄二郎(千葉県)

・ ごちそうさまで。仲が良いからこ

そ言える事ですね 細川光子(栃木

県)・誰でも同感する時がある 西條公

雄(埼玉県)・夫も妻も同じ「当り!!」

ならいいですね 奥那於子(大阪府)

54 男やもめ友あり句あり酒もある

久本にい地(岡山県)

・ 元気でよろしいなあ 原崇雄(埼玉

県)・やもめになっても友、句、酒が

生きがい 守屋高雄(岩手県)・男の

「矜恃」ですね 関本守(新潟県)

◎俳句部門

67 花芒好きに歩いて風聴いて

環 順子(東京都)

・ ひとときの解放感。爽やかな風が心

地よい 小林七重(新潟県)・花野を一

人でのんびり歩きたい。そしたらきつ

と自分探しができるかもしれません

阿部澄江(宮城県)・私も散々散歩し

ますので共感 道給一恵(埼玉県)・

好きに歩くことはありますが風を聴く

と表現する感性は自分にはないと思っ

て： 中山日出子(大阪府)・やさし

さと心地よさを爽やかに味わえるき

いな俳句 内藤紀子(埼玉県)

157 とろろ汁世に逆らはず詔はず

今井勝子(新潟県)

・ 人生かく生くべし 居原田暹(大阪

府)・自然体で見栄を張らず、詔はず

が羨ましい。見習いたい 関山恵一(神

奈川県)・自然体ですごすのに季語の

とろろ汁がいいですね 中野勝子(鹿

児島県)・何事も逆らはずこびず自然

体が最良です。とろろ汁の季語も良

寺内信(埼玉県)・とろろ汁に処世術を

重ね合わせており、納得 伊藤修(埼

玉県)・とろろ汁の季語が良くきいて

いる。このような考え方で余生は幸せ

に生きられると思った 高垣勝代(大阪

府)

189 天命に素直に生きて実紫

桜井葉子(千葉県)

・ このように生きたいものです 若月

理依子(新潟県)・超高齢化社会であ

るが自分の命、生き方を喜べるうれし

さ 小島澄子(神奈川県)・天命に素

直に生きて清しい実紫 浦橋渥

雪(兵庫県)・私も作者の生き方と同

じです 山田富朗(埼玉県)・素直に

生きてがよい。なかなか出来ないもの

だ 本庄準也(埼玉県)・我家の実紫

も毎年元氣です。私も天命に素直に生

きたい 倉沢ひとみ(静岡県)・自然

体の生き方が伝わって来ます 渡辺邦

彦(新潟県)

◎フォトイック

197 コスモスや指揮者囲みて大合唱

寺内 信(埼玉県)

・ 大合唱とは恐れ入りました 有田裕

子(北海道)・コスモス畑の広がり、そ

の中で歌う皆さんの表情も想像できる

堀口伸(埼玉県)

231 恋は今コスモス色に膨らむよ

有田裕子(北海道)

・ コスモスは青春の色恋の色 橋本世

紀男(東京都)・恋に似合うコスモス

の花です 早乙女文子(埼玉県)

◎他にも

6 母に義母看取りて年はめぐり来し

それぞれ墓前に彼岸花咲く

寒川靖子(香川県)

25 仏前に供ふる花を育てあぐ数多の

花に自己満足したり

西山知子(岡山県)

33 保育園へ毎日通る道端でひ孫は素

ばやく秋を見つける

相馬 純(新潟県)

34 被爆して七十五年のヒロシマよ生

き残りし父病みて米寿に

高井瑞江(広島県)

51 二枚では足りない舌の政治家も

橋本世紀男(東京都)

58 猛暑です五体ゴロゴロココロナココ

鏡たか子(山形県)

62 薔薇一輪載せて納体袋過ぐ

富高くにひろ(埼玉県)

65 駅ピアノイマジン流る晩夏かな

井原穂子(東京都)

70 石庭の黙を解くかに秋の蟬

内河邦久(東京都)

81 雲の帯立ち上りたる夏の富士

清まさじ(静岡県)

84 名も知らぬ鳥来て庭の今朝の秋

小澤円梨(静岡県)

92 流れ星忘れることが老いの知恵

長峰正晴(千葉県)

104 鉛色の母の尺差し晩夏かな

若井令子(兵庫県)

111 幼子の魔法の杖や猫じゃらし

すずき笑子(東京都)

128 手のひらに灯す螢火もしかして

大窪美代子(大阪府)

129 名前書く夫の下着や夜の長き

二瓶邦枝(埼玉県)

140 知る顔の見えぬ故郷柿の秋

小林七重(新潟県)

152 粘土から皿に化けるや文化の日

中野勝子(鹿児島県)

161 さるすべりかひなきものによりすが

近澤有孝(広島県)

187 燕去り山家の空のがらんど

松下朱美(静岡県)

Q

前回のアンケート
「喜怒哀楽」で楽しかった
ことは何ですか？

●投稿作品

● 投句を通して皆さんがどんな事を考
えているか等楽しかった

● 自分でも句を作り投稿するように
なったこと 若月理依子(新潟県)

● 毎号名句との出会いそして貴社との
出会い又自費出版の縁も得ました

● 北海道から九州までの人達の俳句を
読めました 山崎吉晴(群馬県)

● 広く視野を持つことができた
白松いちろう(千葉県)

● 毎号投稿作品に出会うこと
鈴木義雄(福島県)

● 皆さんの作品、毎号楽しみでした
三津木俊幸(千葉県)

● どの句にもハッとする感動がありま
した 小澤円梨(静岡県)

● 一人ひとりの作品を読む事が何より
も楽しかった 阿部徳夫(宮城県)

● 他県の方の句も拝見できた
鈴木清子(埼玉県)

● 各地の大勢の方々の作品に触れられ
たこと 大阿久雅子(埼玉県)

● 初めて掲載された時
久保壽雄(北海道)

● 自分や縁ある人たちの自選一作品を
味わえること 安部 哲(新潟県)

● 全国の方の一句一首が楽しみでした
金子ゆり子(新潟県)

● 幅広い作品に出会えた
すずき笑子(東京都)

● 皆様の句に感動したり勉強になった
り、俳句の楽しさを感じました

● 皆さんの俳句とアンケートの記事と
フォトイックのとらえ方がいつも楽
しみ 片山茂子(埼玉県)

● 季語がくつつかず離れず、季語の説
明にならないようにと学べたこと
中野勝子(鹿児島県)

● 自分の句が活字になって目の前に
楽しい歌が詠めるよう学ばせていた
だきました 大鳥居牧子(東京都)

● 各地の知らぬ方々の力作を読むこと
渥美 保(滋賀県)

● 拙い自作がどんなにうれしく励みに
なりました 内藤明子(東京都)

● 短歌・俳句・川柳が適量で同時に読
めること 寺内 信(埼玉県)

● 人生の先輩方の生活が作品に表現さ
れていて老後が楽しみになりました
伏見の馬酒(京都府)

● 投稿という事のハードルが下がって
苦痛が少なくなった事 山里倫子(静岡県)

● 投稿作品が楽しい
椋本望生(大阪府)

● 笑顔礼讃西東
東西のいろいろな句会の指導者のコ
メントが参考になったり納得した
り違うと思ったり
長峰正晴(千葉県)

● 各地の句会の情報がめずらしく楽し
かった 古閑智子(神奈川県)

● 上梓に登場する人間模様と木戸さん
の最後のコメント妙味 内河邦久(東京都)

● 自分史や作品集を上梓の記事を読
み、弟の協力をえて作品集を作った
のも「喜怒哀楽」に刺激を受けたか
ら 濱崎祥子(鹿児島県)

● 質疑の視点が学習になった
土屋喜雄(山梨県)

● 木戸さんが句会を訪れる温かくユ
モアに満ちた取材 木田亜津子(兵庫県)

● 句会訪問がとても良い
関山恵一(神奈川県)

● 句集を出版しようかと思った
平林温州(兵庫県)

● フォトイック
いつも悩まされました
井原毬子(東京都)

● イメージして句を作るのも勉強にな
りました 小山恵美子(大阪府)

● 個々の見方が面白い
田中豊恵(新潟県)

● 例えば赤い帽子を赤く染めた髪と見
る人もあって色々おもしろいです
鏡たか子(山形県)

● 吟行会に通づるものがあり好きでし
た 松下朱美(静岡県)

● 新潟の情報
新潟に行きたくなりました
大木和男(埼玉県)

● にいがたの情報を知ることが嬉しい
佐藤 信(神奈川県)

● 食の歳時記。涎が出ます
有田裕子(北海道)

● にいがた文化の記憶館便り
毎号新鮮な知識を与えてくれました
橋本世紀男(東京都)

● 新潟出身の偉人の多い事を知り、毎
号特に人物の逸話を読むのが楽しみ
でした 中山日出子(大阪府)

● 新潟のいろいろな情報が楽しかった
津布久信雄(東京都)

● 感銘。知らないことを知る楽しさ
望月哲土(東京都)

● 楽しく読みました
若井令子(兵庫県)

● 工房5・7・5
俳句添削講座
溝畑万年青(埼玉県)

● 添削頂いたこと
高野ほづ子(千葉県)

● わかり易い俳句添削講座
石尾曠師朗(東京都)

● 楽しく読ませて頂きました
森 由恵(奈良県)

● 推敲の仕方が役に立ちました
木村徳夫(東京都)

● 俳句が磨かれる様子が楽しく語られ
勉強になります
倉沢ひとみ(静岡県)

● 心に残った作品
自作品が載った時
湯浅芳郎(岡山県)

● 休刊前に句友に取り上げてもらえた
こと 坪田勝秀(鹿児島県)

● 作品への会員の感想が楽しい
原田治男(東京都)

● 俳句が載った事
井田由利子(宮城県)

● 啓発と意欲をもらった
田中 昶(鳥取県)

● 拙作が心に残った作品として選ばれ
たとき 久本にい地(岡山県)

● 自分の句が一度選ばれた事
井上静夫(栃木県)

● 温古知新
一番楽しみにしていました
高野春枝(埼玉県)

・勉強になりました

中川義彦(新潟県)

・業根譚。人生を考える一助になりました
岩田 信(神奈川県)

●仲間ができたこと

・顔も知らない句友が多勢出来たこと

高崎登喜子(東京都)

・日本全国に仲間がいること。これが何より励みになります

吉村充治(埼玉県)

・誌上でいつも拝見するお名前に会えることが楽しみでした

寒川靖子(香川県)

・紙面を通じ知人を得たこと

守安幹男(岡山県)

●家族とのつながり

・いつもマガジンを読むだけの娘が投稿してくれた事 堀木和子(大阪府)

・姉も知人も「喜怒哀楽」に投稿しているの、それを読んで電話でおしゃべりしたり手紙を書いたりした

関原幸子(東京都)

・姪が毎回川柳を投稿しています。元気な様子がよく分かります

檜山柚子香(東京都)

●勉強になった

・結社に属さず作句を始めましたので喜怒哀楽に掲載された句が勉強になりました

間森 坦(兵庫県)

・俳句の興味深い教え勉強になりました

古谷 力(東京都)

●スタッフの一言

・アットホームな雰囲気紙面を通じて伝わりました 城山憲三(愛知県)

・スタッフの皆様の人間性、暖かさに触れたこと 浅田季祐(埼玉県)

・顔がいつも見えていたこと。それぞ

れの一言 高松玲子(埼玉県)

・笑顔の写真と一言が親近感を抱けた

塩崎須美子(神奈川県)

・十人の笑顔に感謝しつつ合掌

齋藤光雄(新潟県)

・スタッフの皆さんの笑顔の写真とお人柄のあらわれた一言

桑原謙一(群馬県)

・毎回楽しかった

鶴田静枝(神奈川県)

・八十四才の不肖への若さのエキスでございました 有坂馨園(福島県)

●詠み人スクランブル

・アンケート欄は貴重な資料ですよ。ミニ世論調査です

・アンケートの「なるほど感」も楽しめた

・読者の方々とスタッフの方々とのつながりと発表の場にコロナうつにならずに感謝 大橋絵代(千葉県)

・小生川柳を10余年やっています、俳句との区別が貴誌ではあいまいと思ひ残念「喜・楽」はあったが「怒・哀」が弱かった。辛口のお別れの辞で申し訳ない 近藤富夫(東京都)

・一冊で(短歌・俳句・川柳)同時に楽しむ事が出来た

・コロナ騒動一時忘れさせてくれました

・紙上での出会いが投句と批評と新しい交流ととても参考になりました

・皆さまが日々の生活の中で作句を楽しみ勉強されているのを知ることが出来た

・すべての号、すべての記事を楽しく読ませていただきました

・仲間と話をしながら夜店や商店街を歩くような気持ちがあったのしい

・投稿者との接触がもう少しあるともっとよかつたと思うが

・喜怒哀楽の本をヘルパーさんから受け取った時が嬉しかった

・マガジンへの投稿者同志の気持ち伝わり楽しませて頂きました

・他県の事ゆえにみな楽しくあった

・タイトル「喜怒哀楽」は一番に気に入りました

・置鮎勝美(千葉県)

・佐伯セツ子(香川県)

・湯浅暉子(石川県)

・早坂絃司(北海道)

・高橋登志子(新潟県)

・今井勝子(新潟県)

・岩村 昇(神奈川県)

・岩崎弘舟(岡山県)

・奥那於子(大阪府)

・船長ほか女性の方々による「喜怒哀楽丸」に八年間乗船できたことが、かけがいのない(真善美)の旅でした。俳句を詠んでよかったです

中村康浩(福岡県)

・俳句の他に、短歌、川柳、そして文章を読む事が出来た

・友達とおしゃべりする。楽しいひとときを過ごす事ができています

・隔月毎に皆さんの消息がわかりコロナ禍中も健康に「喜怒哀楽」はお医者様です

・多くの短詩型文学の愛好者が世に溢れていることを知ったことが一番の楽しみ喜びでした

・川柳だけでなく、短歌・俳句も同時に読ませて頂きほかにあまり例を見ないマガジン

・世の中高齢者が頑張っているなと勇気をもらっています

・一期一会の楽しみを戴きました

・未熟な作品でも自分の名入り印刷物は一味ちがった感があり喜怒哀楽がふえていくことは楽しみでした

・皆様の作品やアンケートで心癒されました

・俳句も短歌も全く詠めませんが毎号沢山の方々の御作に感動しました

・張山てる子(東京都)

・全国的な文芸に接したのしい時間頂きました

・内藤紀子(埼玉県)

・高橋卓二(新潟県)

・合田浩子(茨城県)

・田村よし(茨城県)

・松坂雪雄(埼玉県)

・高橋卓二(新潟県)

・合田浩子(茨城県)

・田村よし(茨城県)

俳句がその昔連句の発句であった頃には、句を詠む力の他に、前句の言わんとする処を瞬時に読み取る力をも磨かなければなりません。ところが、付合を捨て、俳句と名前を変えてからは読みの力より詠みの力が優先される傾向にあります。そして、新型コロナウイルスの出現で句会を開くことも憚られる昨今では、読む力即ち鑑賞力を養うための互選・合評の機会が失われがちで、読む力の劣化が心配です。

しかし「詠む力」と「読む力」は自転車の両輪のようなものです。どちらが欠けても前へは進めません。更に作品の仕上げに行う推敲では「読む力」が物を言います。詠む側から読み手に立場を置き換えて、自作の句を冷静かつ客観的に読む力こそが俳句上達の極意かと思われまふ。句会が無理でも、先人の佳句をじっくりと鑑賞してピンチをチャンスにしてみませんか。

列なしてパンの匂いや町薄暑

焼きたてのパンを並んで買うというだけで街の景が目には浮びます。よって町の説明は省略します。次に上五・中七の捩れを修正します。この二点で読み手はストレスを感じることもなくパンの香ばしい匂いを楽しむことができます。少々汗ばむような日差しにもかかわらず、並んでも買いたいパンとはどんな味でしょうか。

焼きたてのパンに列なす薄暑かな

海向かひヒマワリ凜と風に立つ
正しく美しい日本語であるためには海に向ひてです。

ご参考までに上田五千石の言葉を。俳句をつくると、とたんに日本語がややしくなる人がいる。(中略)「てにをは」の用い方を忘れてしまうのだ。俳句の美しさは「てにをは」にあるといってもいい。それは日本語特有の美にほかならない。助詞の微妙なはたらき一つが千万言に匹敵する。あるいは以上の表現にもなる『元本俳句塾』

という訳で「てにをは」のためには字余りにも挑戦しましょう。次に向日葵には太陽に向って健気に咲く花の意がこめられています。漢字は表意文字です。俳句のように短い詩型ではとても有効な表記方法です。

海風に向ひ向日葵凜と立つ

血の川となりし事実よ原爆忌

「事実よ」が俳句を説明に近くしています。七五年前の八月に確かにこうした悲しい現実がありました。その報告に終らせてはならないはず。事実を省略してみましょう。

血の川となりし日もあり原爆忌

静かな言葉にこそ説得力が生まれます。

粘土から皿に化けるや文化の日

「化ける」には、形をかえるの他に異形のものに変わるの意味があります。更に素性を隠して別人のように装うという、いささか怪し気な意味も。「文化の日」に陶芸のワーク

ショップに参加しての感想、もしくは陶芸展を見ての感想でしょうか。いずれにしても何かを創り出す高揚感を伝える言葉を捜してみましょう。

陶土より皿の生まれて文化の日

友初盆供へし花の重たかり

友初盆の詠み出しが一句全体の印象をつるさくしています。初盆の友ですっきりとした句に変えます。次に重たかりはよく見られる表現ですが、厳密には文法上の誤りが指摘されます。重たかりが正しい表現ですのでご参考までに。

初盆の友へ重たき花供ふ

燕去り山家の空のがらんどろ

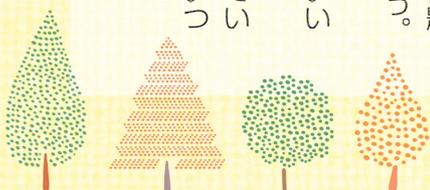
先刻まで飛び交っていた燕が去ったので空がからっぽになったという景はよく分かりますが、少し平板に感じられます。

去ぬ燕山狭の空残しゆく

山家には山里にある家と山里の二つの意味があります。こんな場合は山と山の間の空と限定してイメージを絞りこむこともできます。秋燕は去ぬ燕とも言われます。季語は傍題までよく確かめて上手に表現してみましょう。

「工房五七五」に長いあいだおつきあいでいただきましてありがとうございます。

古代の人達は言葉には魂が宿ると信じていました。どうぞ一語、一語の「ことだま」をじっくりと俳句を楽しんで下さいますように。



良寛を生き方の

モデルとした相馬御風

伊豆名 皓美

相馬御風は、本名を昌治（「しよじ」もしくは「まさはる」といい、1883（明治16）年、糸魚川町長を務めた父徳治郎の一人息子として生まれました。高田中学（現高田高校）時代から本格的に短歌を学び始め、その頃から「御風」の号を用いました。中国の詩人蘇東坡の「赤壁賦」の詩句「浩浩乎として虚に馮り風に御して、其の止まる所を知らず」（どこまでも限りなく続く大空で風に乗れり、とどまるところを知らないかのような）からとったものです。与謝野鉄幹主宰の「新詩社」に入会して『明星』の同人になり、長・短詩や翻訳を発表しました。東京専門学校（現早稲田大学）に進み、同期には會津八一、1年上には小川未明がいました。大学在学中に友人と詩歌雑誌『白百合』を創刊し、同誌の短歌選者を担当しました。美術、音楽、演劇の分野をも含めて、当時の浪漫主義運動の一翼を担いました。

早稲田大学文学部文学科卒業後は、恩師島村抱月が主宰する第二次『早稲田文学』の編集に携わります。また「早稲田詩社」を三木露風、野口雨情らと創設し、口語自由詩運動の先駆となりました。これにより、恩師坪内逍遙の命で、創立25周年記念早稲田大学校歌「都の西北」を作詞しました。不朽の名作として今も歌い継がれています。抱月の新劇運動にも協力し、トルストイ原作『復活』の劇中歌「カチューシャの唄」を師と合作、一世を風靡しました。



相馬御風「大ぞらを静にし
ろき雲はゆくしづかにわれ
も生くべくありけり」糸魚
川歴史民俗資料館〈相馬
御風記念館〉蔵

ところが1916（大正5）年、まだ33歳の若さで、突然故郷の糸魚川に退住します。すでに新時代の文学を牽引していた評論家であり詩人でもあった御風が、その名声のすべてをかなぐり捨て、自らを零に返す、その決意表明が『還元録』でした。ここで御風は、自らを責めて「虚偽なやくざな、からっぽな、殆どもうゆるしがたない妄想者である」と記しています。これに気付いた今、新しい「本当の自分」を取り戻そうとしたのです。ありのままの人間として真実を生きたモデルを良寛に見出し、良寛研究に打ち込みました。当時、良寛は奇僧という見方が一般的で、良寛の学問や詩歌、書のそれぞれについて評価する人たちはいましたが、そのすべてを、ひとりの人間の生き方として捉えた人はまだ誰もいませんでした。御風は、良寛を多感多情の人間として、その生き方を世の人に知らしめました。それが今日の良寛研究の道を開いた大著『大愚良寛』です。その後も良寛研究書を多数出版、墨蹟、詩歌、短歌とさまざまな角度からなされた研究は20余冊にのぼります。越後の偉人良寛の事跡を広く世に知らしめた相馬御風の業績は大きいものがあります。

生き方のモデルを良寛に見出した御風の代表歌とされるのが、「大ぞらを静かにしろき雲はゆくしづかにわれも生くべくありけり」です。御風の人生観や文学観を示す歌とされています。2020年、相馬御風は没後70年を迎えます。にいがた文化の記憶館では、御風の短歌をクローズアップする企画展示「没後70年 相馬御風のうたのころ」を開催します。この企画展示は、糸魚川歴史民俗資料館〈相馬御風記念館〉に伝わる資料を中心とした約30点をおとして、御風の短歌の世界を展覧しようというものです。



相馬御風
〔1926（大正14）年〕
画像提供：糸魚川
歴史民俗資料館
〈相馬御風記念館〉

【展覧会情報】

企画展示「没後70年記念 相馬御風のうたのころ」

会期：12月12日（土）から3月21日（日）

休館日：月曜日（1月11日は開館）、12月28日（月）～1月4日（月）、1月12日（火）

編集室だより

生きているといろんなことが起こります。一日の中であんなこと、こんなこと、ほんといろいろとありますね！ そんな日常に転がる喜怒哀楽を、編集室よりお届けします。

ホームページが新しくなりました

おかげさまをもちまして、弊社ホームページがリニューアルしました。本誌「喜怒哀楽」もバックナンバーふくめ閲覧可能です。あんなページ、こんなページ、ぜひのぞいてみてください。



メールマガジン登録ありがとうございます！

前号にて、メルマガの登録をご案内したところ「デジタルは苦手ですが、この機会に挑戦してみます」との前向きなお便りが続々とありがとうございます！

メルマガご希望の方には、お知らせいただいたメールアドレスに、テストメールを送信しています。本誌12-1月号がお手元に届いたのに、まだテストメールが来ない

なあ…という方は、恐れ入りますが、odp@eseihon.com（オー・ディー・ピー・アットマーク・イー・エス・イー・アイ・エイチ・オー・エヌ・ドット・シー・オー・エム）までメールを送信ください。その際、お客様のお名前を本文に記していただきますようお願いいたします。

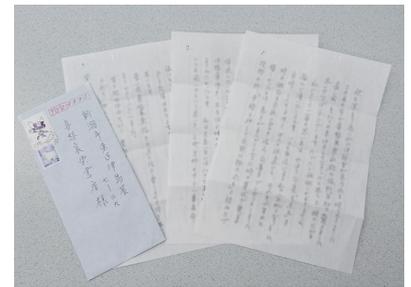
※スマートフォンの迷惑メールの設定によっては、パソコンからのメールが受信不可となっている場合もあります。odp@eseihon.comを指定受信の状態にすれば、受信可能となります。詳しくは、お客様がご契約されている携帯電話会社にお問い合わせください。

メルマガのスタートは、来年を予定しております。

温かなお便り、ありがとうございます

本誌休刊のお知らせに、長い間ありがとうございます、のお便りを多くいただきました。いつもこうして温かく応援くださり、本当に、ほんとうにありがとうございます。紙媒体での「喜怒哀楽」はお休みと

なりますが、これからもまた、気が向かれましたときにはお便りをいただけたら嬉しいです。ぜひ皆さまの近況もたまにお聞かせください。



野菜のポストカード、ご好評いただきありがとうございます

ご好評いただいている季節の野菜が12枚入った野菜のポストカード（送料込み1000円・今回は「赤かぶ」を同封しました）。お客様のお声を受け、縦書き・横書きともご用意しています。会いたい人にも気軽に会えない昨今、このポストカードに一筆したためて今の気持ちを送ってみてはいかがでしょうかでしょう。



お知らせ

紙でのお知らせはしばらくお休みということでお楽しみをご用意しました。

読む。みる。書く。さわる。本をとりまくものにはさまざまな楽しみ方がありますね。これからも皆さまとご縁をつないでいきたい、との気持ちもあり、福袋をはじめとする企画を考えました。ぜひ、一緒に楽しみましょう。詳しくはチラシをご覧ください。お申込み・ご注文は同封の振込用紙にて。

- 1 野菜のポストカード（縦・横）手書きのハガキは、書く方ももらう方も心安らく大切な時間
- 2 紙の福袋「かみ様の贈り物」 A4サイズの色とりどりの紙が50枚入った福袋は限定20セット
- 3 『木戸敦子句集 あいね・くらいね』 120の俳句を収録した小冊子。数年分をまとめるご参考に。
- 4 写真修正 気に入っているのに暗くて…等、ちょっと残念な1枚がとびきりの写真に変身!
- 5 わたし暦 何月スタートでも可能なカレンダー。お手持ちのお写真13枚をお送りください。





倍旧の感謝とともに

—ありがとうございました そしてこれからもご指導よろしくお願ひします—

2001年、当社発行第一号となる母の追悼集「忘れな草」を出版したこと、それを残された父が大変喜び「抱きしめて寝ていた」ことから、このような「抱きしめたい」本を作っていこうとスタートした本づくりの歩み。まずは当社を知っていただく、その方々の広場をつくろうと、創立から軌を一にしてきた読みもの、それが「喜怒哀楽」でした。

最初、返信されたアンケートは3通ほど。その後、皆さまの投稿作品を掲載したり、インタビューのコーナーを設けたり、俳人・歌人による「詠み人のリレーエッセイ」を始めたり、有料にしたり、無料に戻したりと、紆余曲折を経ながらの約19年弱。その間、温かいご協力とご支援を賜りました皆さまには、言葉では尽くせぬほどの感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

ぬくもりのある筆跡でハガキにびっしりと書かれたアンケートの声、それらにどれだけ力をいただいていたことでしょうか。「楽しみにしているよ」、「がんばっているね」との日本各地からの応援に、またがんばっていこう! と背中を押していただきました。今回の休刊は残念ではありますが、コミュニケーションの方法は時代とともにあるもの。当社の新しい道・方向へのチャレンジとご理解のうえ、今後とも改めてのご協力ご支援を伏してお願ひする次第です。

具体的には、来年よりメルマガでの新しい「喜怒哀楽」のご案内やWEB上でのご投稿欄「短詩の広場」を考えております。いずれ「喜怒哀楽大賞」のようなものでもできればと夢見ております。私たちと一緒に、新しく挑戦してくださる方は、ぜひご登録をお願いいたします。

当社は本を作っている会社ですので、紙でしかない味わえないよさ、実在するものの強さを充分に感じております。そして、このコロナ禍のなかで、直接会って同じ時間と空間をとる大切さに勝るものはないと、今さらながら感じています。

時々、皆さまにデジタルではない紙でのご連絡もさせていただきたいと思っています。そしてこれからも変わらず「抱きしめたい本づくり 抱きしめたい人生づくり」の応援団として、文字や言葉や写真といったものを本という大切な形にまとめながら、皆さまの豊かな人生づくりの一端を担っていきたくと思っています。変わらずにここ新潟で元気しておりますので、これからも、皆さまのお手紙等いただけたらうれしいです。



スタッフの一言 Q.「喜怒哀楽」で楽しかったことは何ですか?



木戸 敦子



取材にカメラ・録音機一式忘れたこと、録音されていなかったこと、締切間近で運転しながらレコーダーを聞き娘の試合中に手書きしたこと、過ぎ去れば全てがキラキラした思い出。

古川 久美子



取材でいろいろな記念館などに行ったこと。早朝の瓢湖に白鳥を激写に行ったり。麓谷虹児記念館の階段を正座でスライディングして靴のひもが切れたこともあったな……。

菅 真理子



雪に埋もれた碑を探しさまよったり、笹だんごづくりにトライしたり、遠方のお客様にお目にかかったり、たくさんの思い出が。皆さま、楽しい時間をありがとうございました!

松野 沙依



皆様からお送りいただく返信ハガキを毎回楽しく読ませていただいております。また、自分が書いた文章が冊子になり、全国に届けられていると思うと、胸が躍りました!

山田 民子



皆様の返信ハガキをカウントし入力。知らない漢字や言葉を勉強できて楽しい時間でした。返信枚数も「前月より増えた」や「あと〇枚で先月越え」と一喜一憂していました。

木伏 美恵



心に残った作品大賞の方々に原稿依頼をするために電話したこと。早く引き受けてくださり感謝しかありません! スタッフの写真撮影もいつも笑いが溢れていて楽しかった!

上村 眞智子



17年間制作に当たらせてもらい今しみじみとした気持ちで振り返れば、笑顔礼讃でお客様のお話涙しながらレイアウトした思い出あり、印刷入稿日にはいつも嫌な汗をかいていました。

石山 由希子



一時期、印刷を担当していました。懐かしいなあ。印刷と折りを一緒にしてくれる印刷機でしたが、紙詰まりを起こしやすく冷汗と本当の汗をかきかき刷りました。いい運動でした。

吉田 瞳



スタッフ写真の欄に、吉田妊婦ショットや産まれた娘と一緒に紙面に載ったこと。そしてお客様からお祝いの御品まで頂戴しありがたい御縁に感謝です。本当にありがとうございました。

佐々木 祥子



スタッフの一言で毎回コメントを考える時。お題も面白いし、自分の振り返りは過去の自分との対話だと思うのでその瞬間が楽しかったですね。

足

黒岩徳将

頭から始まった本コーナーの掉尾を飾るのは「足」。「這えば立て立てば歩めの親心」の言葉よろしく、「喜怒哀楽」はよちよち歩きの頃から皆様の温かい気持ち支えられ、「ここまで歩んできました。これからはしかとこの足で歩んでまいります。」

ついに身体の果ての部位である「足」までたどり着いた。

「膝」「脚」などの部位についての考察をすつとばしてしまったが、「足」という大地に接地する箇所で締め括りた。すつくと立つためには足が不可欠であるし、フロアリングや畳、アスファルトや靴は、足で皮膚感覚を感じる絶好の機会だ。

菜の花や河原に足のやはらかき

田中裕明

河原にたくさんの菜の花が吹かれている。座って足を投げ出したのだろうか。あたたかくなって靴を脱いだのかもしれない。河原に足を置いてみたところで、物理的な硬さに変化するはずがないのだが、暖色の菜の花と水の流れを思わせる河原という語の力が、「やはらかき」という把握に説得力を持たせる。とても快く、なつかしさと甘やかさが膨れ上がる句だ。田中裕明が二十歳の時に私家版で出版した第一句集『山信』の三句目に置かれる句である。

手をあげて足をはこべば阿波踊

岸風三樓

男らの汚れるまへの祭足袋

飯島晴子

祭事と足の関係も見逃せない。岸の句は非常に平明な言葉遣いで阿波踊の本質を描いている。「手」を描けば「足」もがついてくるといった具合だ。よさこい踊りはもつと各部位の独立性とスピード感が優先されるのでこうはいかない。飯島句はこれから使われる白足袋を想像することで「汚れる」という語に聖性をもたらした。白足袋の中には人間の象徴である足がある。

夜のぶらんこ都がひとつ足の下

土肥あき子

かなかなや平安京が足の下

高島春佳

足を起点にして大きな空間（時空を含む）を描き出した二句。都と人間（足）の上下関係の転倒が痛快である。

遠足の子らみどりごに触れたがる

鶴岡加苗

そういえば、行事の遠足は「足」を「遠」に運ぶと書く。生物の移動の根本は足によるものであり、人間全体でなく足がフォーカスされているこの言葉はどことなく可笑しい。遠足もみどりごも、社会生活の中にある一般的な語ではあるが、この関係性を描くことで新鮮さが生まれた。少年少女は、きつとみどりごの足にも触れていることであろう。

投げ出して足遠くある暮春かな

村上鞆彦

脱ぎきたる靴の遥げき裸足かな

藤井あかり

どちらの句も、体と足、靴と足といった距離に感じる叙情性を詠っている。裸足は「素足」ともいうように、何も纏わないありのままの身体の状態が、季節を感じる言葉として採用もされる。親しさがあってこそ名残やさびしさと結びつくのであり、足は親しみをもつためのきつかけ作りをしてきている。

一つの終わりは、次の始まりにつながっている。季節の移ろいほときにそのことを教えてくれるが、身体にも言えることかもしれない。足で踏み出す次の世界へ、行くしかないのである。

タッパーに詰める豚足花カンナ

徳将

2020.12-1. vol.113 (2020年12月10日発行/隔月発行)

●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション

〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29

TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550

株式会社ミュージズ・コーポレーション 0120-819-395 Facebookもチェック

e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

郵便局口座番号 00530-4-81370 口座名 株式会社ミュージズ・コーポレーション

編集後記

創刊から19年弱。その間、自身がどれだけ成長したかを問われると非常に心許ない現況。でも、休刊を惜しむ数々の声やアンケートの声、投稿作品にも「喜怒哀楽」への感謝や新しい船出を応援くださる作品があり胸がいっぱいになった。当初の目的である「皆さまの広場」に少しはなり得たのではないかと。こんなことがあるのだ、と思った1年だった。でも、別れに星影のワルツを歌おう。そう、どんな時も口笛吹いて進んでいきたい。心からの感謝とともに！（木戸敦子）